

新鉱床の発見つづくモンゴル

岸本文男(鉱床部)

モンゴル人民共和国では 社会主義共同体諸国の学者や専門家によって 鉱物資源の把握と開発をめざした調査・研究が進められている。 その地質学者たちの調査・研究の成果と今後について 経済相互援助会議事務局地質部長 B. エロフューエフ地質・鉱物学博士は 次のように語った。

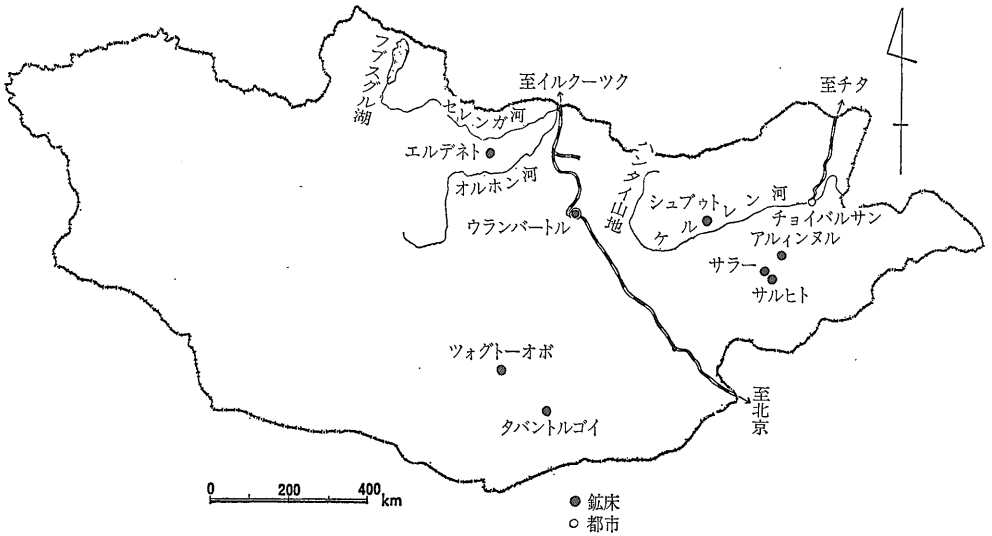
最近 モンゴルでは 地質学者たちが次々に新しい鉱床を発見している。 セレンガ河とオルホン河の河間地域で発見された銅鉱床は 世界10大銅鉱床の中に入る。 モンゴルに散在する炭層は 100 億t以上と見積られる。 螢石の鉱量は モンゴルが世界の1・2位を争っている。 さらに モンゴルはタングステンと錫がきわめて豊富であり 鉛 亜鉛 鉄鉱 金 宝石も少なくない。

モンゴルは ソ連が“地質学の対話”を始めた最初の国であることを思い起す。 1932年 最初の総合調査隊がこの国に派遣され ソビエトの偉大な地質学者 V. A. オブルーチェフがこの調査隊の先頭にたった。 そのときからモンゴルとソビエトの専門家たちは 共同して 数100の鉱床を発見してきた。 たとえば この10年を

記念したのが エルデネトにおける銅-モリブデン鉱の発見とフスグル湖地域での燐鉱生成盆地の発見であった。 経済相互援助会議の総合集成計画に照して 社会主義諸国は フスグル鉱床をベースとした黄磷生産の見通しを研究する専門的な場所をすでに考えている。

1960年ごろまでは モンゴルの地下資源の研究は もっぱらソビエトの専門家の力量に頼っていた。 しかし同時に モンゴルでは自分自身の地質学者集団が主としてソ連留学によって形成されていた。 1963年 経済相互援助会議常設委員会に地質部会が設立されると すぐに経済相互援助会議はモンゴルにおける部会の活動を広く呼びかけた。 兄弟諸国の学者や専門家たちは モンゴルにおける重要鉱物資源の分布の法則性を把握することに注目した。 探鉱も開始された。 ブルガリアの専門家たちは 中部と南部の地域の探査におもむいた。 そして今では すでに彼らによって ツォグト-オボのカオリン鉱床が確定され タバントルゴイの原料炭が精査されている。

東部では モンゴルとハンガリーの専門家グループが



第1図 本文中の地名と鉱床名

地質図幅調査と鉱床探査を行い アルイン—ヌル斑岩銅鉱床 サルヒト多金属鉱床 サラータングステン鉱床を発見した。

ハンタイ山地の西稜山嶺では 1965年から東ドイツの地質学者たちが調査を行い 有望な金鉱床を発見した。サルヒト亜鉛鉱床（サルヒト多金属鉱床とは別のもの ハンタイ山地にある）の発見は ドイツとモンゴルの専門家たちの共同の努力の結果である。

西モンゴルの険峻な地域は ポーランドの地質学者たちが研究し さざまな鉱床が発見された。

チェコスロバキアの専門家たちは 現在 ハンタイ山地東北地区の砂錫鉱床を精査している。

各国の貢献は 野外調査にとどまらない。地質図幅などの編纂 モンゴル地質専門家の養成 最新技術機器の保全もそうである。本質的には 兄弟諸国の集団的な力量によって モンゴルにおける強力な地質調査・鉱床探査事業が組み立てられている。

地質調査・鉱床探査事業の推進過程で 協力形態が改善されてきている。以前には 社会主義諸国は一般に双務を基礎として上記の事業を行っていた。しかし今では 多務的な地質調査・鉱床探査という より高い段階に移行している。1976年の春 経済相互援助会議によって組織された国際調査隊がフィールドに出た。国際調査隊を作る発想は モンゴルの提案によるもので 経済相互援助会議の全参加国がこれを支持した。この調査隊の課題は 卒直に言えば 会議の総合計画に発するもので モンゴルの地質研究度を高めることにある。だが もちろん 鉱物資源の解明は すべての社会主義共同体諸国の希望にそうものでもある。

この国際調査隊の管理機関は 全権協議会で モンゴル代表 それにブルガリア ハンガリー 東ドイツ ポーランド ソ連 チェコスロバキアの各代表で構成され これらの国々は無料奉仕のうえ 平等な分担金によって調査・探査を支えている。キューバとルーマニアは地質学者と地球物理学者をモンゴルに派遣するという形で参加している。

ハンガリーとチェコスロバキアからは野外用の装備 ブルガリアからは調査用の自動車 東ドイツからは修理用の設備 ソ連からは試錐機器 ポーランドからは探査機器が すべて無償で供与され この国際調査隊の参加者は それぞれの国の地質担当省から派遣される形をとっている。我々は 当初 この調査活動は1980年に終

わると考えていたが 調査地域の有望性が見えてきた現在では 国際調査隊の機能を1990年まで維持する考えである。

国際調査隊のキャンプは ほぼベルギーの面積に等しい北ケルレン地域に散らばっている。この地域は 鉱床地質学的には有望で 輸送の立場からみても都合がよい。ウランパートル市とチョイバルサン市の間に拡がり ソ連と2本の鉄道で結ばれ したがって 他の経済相互援助会議加盟諸国とも鉄道で結ばれているからである。

現在 約500名を数える調査隊は数班に分れ 1班は北ケルレン地域の鉱床地質学的な評価を行い 鉱物資源の存在範囲を決定し 今後の探査方針をうち出している。残る諸班は 鉱物資源発見部分の稼行価値を決定している。国際調査隊には それ自身の地球物理探査班があり それ自身の中央実験室をもち 分析・解析作業を進めている。

モンゴルの広大な大地で働く専門家たちの労働は きびしい。たとえば この5か年間だけでも 総延長40,000mの試錐を行い 6,000mのピットと数10万m³のトレンチを掘らねばならないのだ。

1980年までには 資料の処理が終らず 結果の全面的な評価はまだ無理であろう。それでも シュブウトの螢石鉱床 パインハン地区のタングステン・モリブデン鉱床 それに銅と錫の鉱床群は今後も研究を続ける価値があることは 確かである。

社会主義的共同体の一致した経済発展計画を羅針盤として国際調査隊の事業は進められ 調査隊による新発見は 人々の集団の努力のたまものである。彼らはそれぞれの国から派遣され 古き大地にやってきて 国際的義務感にしたがい モンゴルを援助しているのである。

国際協力集団形成の問題は 現在も将来も“純粋地質学”の枠をはみだすだろう。その問題としては 人々の生活 道徳 習慣の体験が蓄積された もっとも注目すべき作用がある。共同の事業は 友情と相互信頼の偉大な力を生む。思うに 上述の問題は我々の社会科学 哲学者 社会学者 それに作家たちが関心をもちねばならない。国際的な集団の中で成熟する交流は 各国の生活の社会主義的映像だからである。

（〈Новости Монголии〉 1979. 3. 9付より）